

笠井 潔

ロシエオール家殺人事件

サマー!
アポカリプス



笠井潔

サマー・アポカリプス

ロシユフオール家殺人事件

角川書店

サマー・アポカリプス

笠井 潔



昭和五十六年十月五日 初版発行

発行者 角 川 春 樹

発行所 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三(二六五)七一―一大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八(郵)一〇二

大日本印刷・鈴木製本

© Kiyoshi Kasai, 1981 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872320-0946(0)

目次

序章	セーヌ河岸の狙撃者	7
第一章	異端カタリ派の脅迫状	11
第二章	エスクラルモンド荘の惨劇	49
第三章	ラヴラネ墓地の銃声	103
第四章	カルカソンヌ城壁の首吊り人	159
第五章	モンセギユール岩峰の死闘	239
終章	トゥールーズ病院の断食者	306

装
丁

大
西
重
成

サマー・アポカリプス

——ロシユフオール家殺人事件——

《本書に登場する人物》

ジゼル・

ロシュフオール

オーギュスト・

ロシュフオール

ニコル・

ロシュフオール

ジュヌヴィエーヴ・

ロシュフオール

レイモン・

ロシュフオール

アラン・

ロシュフオール

ビエール・

ロシュフオール

ジャン・ノディエ

ルメル夫人

ヴァンドル父子

* ナディア・モガールの年少の女友達。パリ大学の学生

* ジゼールの父。へ南仏財界の帝王」と呼ばれるロシュフオール家

第六代目当主でトゥールーズの大実業家

* オーギュストの若い後妻

* オーギュストの先妻でジゼールの実母。十年ほど前に殺害された

* ジュヌヴィエーヴの父。第五代目ロシュフオール。十年ほど前に

病死

* ロシュフオール一族内でオーギュストの最大の競争者

* ニコルの父。ロシュフオール一族内でオーギュストの同盟者

* ロシュフオール家の従僕。ジュヌヴィエーヴを殺害した罪で十年

間服役

* ロシュフオール家の使用人

* ロシュフオール家の使用人

シャルル・シルヴァン

シモーヌ・リュミエール

ジュリアン・リュミエール

ワルター・フェスト

ビランクール教授

モロー神父

ポール・ソネ神父

フェルナン・ランペール

アンリ・ドウルニユ

マルティン・クリーク

カサール隊長

ジャン・ポール・バルベス

ナディア・モガール

矢吹 駆

* 南仏中世史を研究するパリ大学助教授

* 南仏セツト市の高等中学の哲学教師で「^Mオクシタニ解放運動」の活動家

* シモーヌの弟。核物理学研究者でロシュフオール原子力研究所に勤務

* ミュンヘンに店を持つドイツ人骨董商

* トゥールーズ大学の歴史学者

* サン・セルナン寺院の神父

* 南仏シャートウイユ村の田舎司祭

* 戦中発行されていた「^M南仏通信」誌の副編集長

* 「^M南仏通信」に寄稿したトゥールーズの郷土史研究家

* ニュルンベルグ裁判で死刑になったナチス親衛隊中佐

* 南仏ラヴァネ町の憲兵隊長

* パリ警視庁警部でシャートウイユ村出身者

* パリ大学の学生で本書の語り手

* 謎の日本人青年

われ見しに、視よ、蒼腿めたる馬あり、
之に乗る者の名を死といひ、陰府これに
随ふ。かれらは地の四分の一を支配し、
劍と饑饉と死と地の獸とをもて人を殺す
ことを許されたり。

序 章 セーヌ河岸の狙撃者

禍々しい悪意が滲んだその出来事は、不吉な酷熱の一日もようやく濃い紫色に黄昏れていく頃、前触れさえなくだしぬけに私たちを襲った。

ルイ十四世の時代以来といわれる猛暑の夏だった。こんな狂気じみた気候に始めから抵抗力を持ち合わせていないパリジャンには、耐えることのできないような日々だった。それがもう三週間以上続いていたが、兇暴な炎熱の日々はなおも果て知れなかった。

膨張したサハラ砂漠が、地中海と西欧諸国を残らず貪婪に呑み込んでしまったときえ思える、灼けつく高温と乾燥の熱い夏だった。五月下旬からの異常気象のため、粗い肌色の岩で作られた都会生活の歯車は、不気味に軋みながらあちこちに微妙な狂いを見せ始めていた。

たとえば、鉱泉水を詰めて横腹に薄い青や桃色の商標紙を貼ったポリエチレン壺が、食料品店やスーパーマーケットの店頭から見えなくなつた。続いて清涼飲料の硝子壺さ

え姿を消し、麦酒も品薄になり始めていた。家庭では、甘い臭気とともに大量の肉や野菜がたちまち腐敗して、汗まみれになった主婦たちの苛立ちと不機嫌を、さらに極限まで煽り立てるのだった。この都市で冷房設備のある僅かの場所、映画館、銀行、百貨店などには、涼を求める群衆が夥しく殺到して通常の営業を妨げることも稀ではなかった。例年ならば、盛夏の頃でも摂氏三十度を超える日などほんの一、二回しかないこの都市は、予期せぬ猛暑の襲来に完全な無防備状態をさらけだしていた。

人々はその日の入荷分を奪い合うために、開店の時刻よりも遙か以前から、食料品店の入口に陰気な長い列を作った。行列を拒む者は、鉄錆と石灰の味でおよそ喉を通らない、生温い水道の濁り水でその日一日を我慢しなければならぬのだ。列を作った人々は、頭上で燃え上がり髪や皮膚を焦がす白熱の光球を盗み見ながら、大気に充満した熱の微粒子で鼻腔、喉、肺を灼き、なおも惨めたらしく喘ぎ続けた。

炎天の下、店の開く時刻を待つ人々のなかには、買物を頼むための家族や友人を持たない孤独な老人が幾人もいて、貧血や心臓発作で倒れることも稀ではなかった。なかには昏倒したまま死に至る老人さえもがいて、新聞に陰惨な記事を提供することになった。こんな行列のなかで、私は横にいる老婆の長々しい呟きを聴いたことがあった。醜く縛

割れた唇から漏れ出す言葉の意味が、私には始めよく理解できなかった。注意深く聴きとってみると、それは、蒼褪めた馬が登場するヨハネ黙示録の一節に違いなかった。軽い日射病にやられたのだろうか、冷たい汗で全身を濡らし、襲いかかる眩暈に耐えようと両脚を石畳に踏みしめた私の耳に、老婆の陰気な呟きがなおも低く飮（くみ）していた。こんな黙示録の夏は、まだようやく始まったばかりだった。

緯度の高いこの都市では、夏至に近い頃のため、陽が落ちて暗くなったばかりだというのに、時刻はもう真夜中に近かった。繁華街を外れ、どことなく荒廢の雰囲気（きふき）が染みついたただ広い河岸通りには、行き交う人影も疎らだった。朝の四時か五時には空が明るみ、たちまち炎熱の一日が始まってしまったため、人々はつかのまの夜と闇が提供する乏しい涼氣を貪ろうとして、早くも家々の奥深く逃れ去ってしまったのだらう。

倦むほどに長たしい六月の黄昏だった。見渡せば、燃え上がる太陽の炎の腕で絶えまなく鞭打たれ、疲弊し切った首都の街並が、優しげな濃い紫色の霧りに包まれて、ようやく穏やかに安らぎ始める光景を眺めることができた。

「カケル、見て」

独り不可解な想念に沈んで黙り込みがちに横を歩く青年に、私は、川沿いに点々と配置された街灯の蒼白い光で、

ぼんやりと背後の闇から浮き出して見える対岸の石壁を示していった。

「ほら、セーヌの水があんなに減ってしまっている」

川岸の石壁には、水面と平行に夜目にもくつきりと一筋の線が引かれているように見えた。線の上は長年の風雨に石壁も汚れ黴（かび）ずんでいるのに、そこから下の壁面は長いこと水面下であって流れに晒され続けてきたためだろう、積まれた切石の生地を闇のなかにも白々と曝（さら）しているのだ。石壁に刻まれた横筋は先月までの水位を示すもので、今、川の水面は、それと較べてあまりにも低過ぎた。

「そうね、この異常気象ではセーヌの水だって涸れてしまわう」

矢吹駆は無愛想に私の無駄口を黙殺した。五月の終わりで以来パリジャンの話題を擱（お）き離さない猛暑と早魃（そうた）に対してさえも、カケルの態度はまったくの冷淡で際立っていた。私が、呼吸に困難を覚えるほどの熱気で喘いでいる時にも、カケルはほとんど汗さえかかず、まるで平気な顔をしていた。砂漠の放浪で鍛え抜かれた肉体には、このくらい暑さは苦にもならないらしいかった。

「あの女の警告だけど、あなたはもう思うの」

無言でただ歩き続けるだけの相手に、私は話題を変えて話しかけてみた。少し神経質になっていたのかもしれない。蟬（せみ）鳴った沈黙が息苦しくてならなかったのだ。謎の女が囁

いた、脅迫めいた警告のためかもしれないなかった。

不意に立ちどまって、カケルは私の方に顔を向けた。微かな物音に耳を澄ませる時に似て、ほんの少し眉を顰めていた。河面を渡って、日中の熱を残してまだ生温い微風が、時折、思い出したようにもの憂く吹き寄せてきた。風は、シャツやジーンズに染みた汗の匂いをゆっくりと吹き散らした。

「カケル、ねえ……」

言葉を継ぐとしたその瞬間だった。鈍い衝撃で、突然世界が横転した。私は隣りの青年に押し倒され、乱暴に舗道の敷石に叩きつけられたのだ。それから、加速して車体を軋ませながら殺到して来る自動車の気配、横ざまに倒れた私に怖い勢いで覆いかぶさった肉体のしなやかな重さ、深夜の河岸通りに二回響き渡った短い爆発音。これらがほとんど一瞬のうちに重なり合って私を襲った。

「痛いわ、カケル。いったい、なんなの」

私は思わず呻き声をあげていた。

「……白のシトロエンDS」

私の問いを無視して、カケルが低く呟いた。彼は、上体を片肘で支えるようにして、私を圧迫しないために注意しながらも、走り去る車のエンジン音が充分に遠ざかりそして消えるまで、倒れた私の頭、肩、背から身を起こそうとはしなかった。私の方は、肩先にカケルの身の重さを感じ

ながら、しんと冷たい舗石に頬を押し当てたまま、四肢を大地に投げ出しているより他なかった。倒れた時、敷石に打ちつけた腕や腰が少しばかり鈍く痛んだけれど、特に怪我をした様子はなかった。たぶん、カケルが巧みな配慮で上手に転ばせたからだろう。

髪を路上に散らし、横ざまに軀を投げ出している私の上に、両肘で体重を支えるようにしながら、急速に遠ざかって行く赤い尾灯を凝視している青年がいた。顧慮にまで切れ込んだ大きな眼が、闇に滲む赤い灯を宿していた。下から見上げる青年の姿は、襲撃に備えて全身の筋肉を激しく攣らせ、力の奔流を一点で抑え切っているネコ科の大型獣を思わせた。醒めて鋭く緊張した青年の横顔に、私は吸い寄せられるような気持でひたすら見いていた。そして、茫然とした、とりとめない思いにさえ耽っていたように思う。たとえば、こんなに近くから嗅いでみても、カケルにはほとんど体臭というものが無いのはなぜだろう、といった風な。

それは、もちろん、全部で十数秒ほどのごく短いあいだの出来事だった。まもなく、カケルは身を起こし始めたが、その動作がいつになくぎくしゃくして、いかにも緩慢に見えるのが不自然だった。その時、首筋から流れ込んで背と肩を濡らしている生温かいものに気付いて、曖昧に乱れた気持のまま、何気なくそこに掌をやった。街灯の薄ぼんや

りした光に翳して見ると、掌は、少しべとつく赤いもので汚れていた。

「カケル、血よ」

興奮して夢中で叫んだ私に軽く頷き、カケルは街路と川を区切つて続いている石の手摺に、軀をそつと凭せかけた。私は、慌てて硬い石畳に両手を突き、そのまま横坐りになつて青年を見上げた。川沿いの自動車専用道路からのエンジン音が、遠く、微かに響いていた。手摺に凭れた青年の姿が異様だった。息を呑んで見つめる私の眼に映つたのは、片手で押さえた右肩の傷口から、なおも激しい勢いで流れ出す多量の血のために、上半身まるで血まみれになつていて、幽鬼のように異様な姿だった。

「カケル、怪我なの、どうしたの」

「二発目はどうしても避けられなかった。たいしたことはない」

動転してうわづつた私の声だったが、カケルは、心憎いほどに落ち着き払つて感情さえ窺わせない口調を、少しも崩してはいなかった。私が事態の意味を理解したのは、ようやくその時だった。

私たちは、通りすがりの自動車の窓から狙撃されたのだ。あの短い爆発音は銃声だった。そして、危険を察したカケルが、庇おうとして私を押し倒したのだ。

「たいへんだわ、カケル、あなた死んじゃうわ」

私は青年が死につつあるのだと思ひ込んだ。足元の舗石までも濡らし始めた血と、まるで血の気なく蒼腿めたカケルの顔のせいだった。私は青年の横に駆け寄り、泣きそうな声で叫んだ。

「死んじやだめよ、死んじやだめよ」

青年の唇が微かに歪んだ。それはまるで、棺のなかの死者が漏らした薄笑いめいて、私をぞつとさせた。それからカケルが、僅かに軀を傾け、私の耳元にこう囁きかけた。「ナディア、あの女のことは誰にも話してはいけない、わかったね」

その言葉には抗うことのできない強い調子があった。私は、叱られた子供みたいに夢中で頷いてみせるだけだった。生温い微風が闇を渡り、髪を撫であげて消えていった。喉には固く息苦しいものが充滿し、声をあげることさえできなかった。ようやくその頃、抑え切れない微細な顫えが、全身の皮膚を小さな泡粒になつて絶えまなく駆け回り始めた。

黙示録の四騎士が彷徨する殺戮の夏の、これが禍々しい最初の予兆だった。

第一章 異端カタリ派の脅迫状

1

中世異端カタリ派の聖地、南仏モンセギユールを舞台に演じられた惨劇の序幕は、疑いなく六月のバリで既に開かれていた。六月二十一日の深夜、アルベール一世通りで矢吹駆を狙った銃撃は、その日まで約一か月のあいだに起こった出来事の、最初の中間的な決算だったばかりか、来たるべきモンセギユール連続殺人事件への血まみれの発端でもあったのだ。「黙示録の夏」の序幕は、矢吹駆という「墮天使の冬」の告発者が流した血にまみれて重々しく閉じられたのである。

近年にない狂気じみた猛暑がバリを襲い始めてから数日め、五月最後に当たる日のことだった。私はリヴィエール教授の講義を休んで、直接、オデオン裏の珈琲店に向かった。地下鉄オデオンを降りて短い坂を登っただけなのに、

全身はもう汗まみれだった。街々は白い炎を通して見るもののように絶えまなく揺らいでいた。先週末までの美しい五月のバリは、一転して地獄めいた酷熱の巷に変貌し終わっていた。

「なんていう糞暑さだ」

日射を避け、店の奥まった場所に席を取った私だったが、洞間声を張り上げる男たちの会話は嫌でも耳に入ってくる。カウンターで麦酒を飲んでゐる二人のうち、額の禿げ上がった年配の男の方が、小太りの若い男に話しかけていた。二人とも、汗で汚れた青の作業衣の胸を、無造作にはだけていた。暑苦しそうに密生した胸の毛にも無数の汗粒が光っている。

「これはな、天氣が狂っちゃったんだ。どうしてか、お前、判るか」

「いいや」若い男が首を振る。

「地中海が油で砂漠になっちゃったんだ」

年配の男が、皺だらけの、汚れて黴ずんだ手巾で乱暴に額の汗を拭いながら、大袈裟に顔を顰めていった。よくいる、町角の一言居士に違いなかった。無知な同僚に新聞や雑誌や、時には書物から齧ってきた新知識を披露するのが生甲斐だという性格の男。私の家があるモンマルトル裏の珈琲店にも、この手の愛すべき物識りが少なくない。私は、男の謎かけめいた言葉に少し関心を持って聴き耳を立てた。

「そんなこといったってよ、海が砂漠になるわけはないぞ」どことなく鈍重そうな印象の、小太りの若者が頭を振りながら反論した。

「ところがなるんだよ、油のせいだな。いいか、こういうわけだ。よく聴いてろよ。」

夏、風は南から北に吹く。アフリカの高気圧から北海の低気圧に空気が流れるってことよ。普通ならアフリカの熱い空気が地中海を渡って来るうちに、水気を吸い込みもするし少しは冷やされもする。だからこのあたりで雨も降るってわけだ。ところが、地中海の表面が油で汚れてな、おかしなことになった。海に油で蓋をしたのと同じだから、水分が蒸発しない。カラカラに乾き切ったサハラ砂漠が、地中海まで広がったと考えればいい。こうなれば、マルセイユもパリも、いつてみればアフリカの一部よ。雨も降らなけりゃ、涼しい風も吹かねえ。この酷暑さはそのせいなんだ。地中海が油で砂漠になっちまったのさ」

「油で地中海がねえ」若い男はしきりに感心している。

「そう、油でだ。中東から運んで来た油が地中海を汚染しちゃったんだ。イタリアの海は汚なくとも泳げないって話だぜ」

男たちはひとしきり話し込んだ後、釣りの黄色い銅貨を幾枚か小皿に残したまま、胴間声で日中の暑さを呪いながら店を出ていった。ありそうなことだがほんとうだろうか、

と私は思った。今度、エコロジストの医学生に会った時、忘れずに確かめてみることにしよう……。

カケルは正確に時間通りに着いた。いきなり私の前の席に着くと、前置きもなしに日本語の個人教授を始めようとする。私は真正面から無愛想な青年の顔を見据えるようにして、はつきりといった。

「宿題はなし。今日は日本語の勉強もなしよ。私、あなたときちんとした話がしたいの。いいわね」

店を出て、私たちは先週と同じ道筋でリュクサンブール公園に向かった。違うのは、もう夕方の時刻だというのになおも狂ったように燃え続ける白い太陽と、街中にたちこめる、甘く湿った汗の匂いだった。公園の鉄柵の下で私はカケルにいった。公園横の路地がサン・ミッシェル通りに出る少し手前の、私には忘れられない場所だった。

「ここで私、あなたに酷いことをいったわ」

それは先週のことだった。私は夢中になってこう叫んだのだった。『あなたが、あなたが殺したのよ。マチルドだけじゃなく、アントワーヌもジルベールも、あなたが殺したのよ。バルト夫人がそうしたように、あの二人だって片隅で苦しみながら生きていくことはできたはずだわ。それなのに、あなたがアントワーヌたちを無慈悲に冷酷に追いつめていったんだわ。二人はいつも、どこにいても、あなたの眼が背中に貼りついてることを感じた。あなたの裁

くような冷たい視線に追われるようにして、破壊に向かつて頭から突進する以外なかった。自分は犯罪者ではない、自分は不正な人間ではない、こう悲鳴をあげながら、ただ前へ前へと怖しい勢いで進む以外なかったのよ。それにあなたは冷たく証拠を要求したんだわ。犯罪者ではないというのなら、それを証明してみろ、その証拠を見せてみろ、あなたはこういったんだわ。彼らにはもうどうすることもできなかった。そして、そして……」

……そして、ラルース家連続殺人事件の犯人だったアントワヌとジルベールは、マドリッドで自殺同然の死に方をした。二人とも、私の親しい友人だった。アントワヌは、そう、友人以上だった。

ラルース家の事件は、去年の暮れのある寒い晩に始まった。私と同じパリ大学の学生アントワヌ・レタールの、パリに住む大金持の叔母たち——オデット・ラルースとジョゼット・ラルースのところに、スペインで死んだはずの男から不吉な脅迫状が舞い込んだのだ。そしてまもなく、姉のオデットは、エトワール広場に近い自宅の豪華なアパートマンで、無惨な首なし屍体となって発見された。そして妹のジョゼットは、事件の前夜から謎の失踪を遂げてしまっていたのだった。

オデット・ラルースの首なし屍体事件を担当することになったのは、パリ警視庁のモガール警視——つまり私のバ

バと、ババの長年の相棒であるバルベス警部だった。警官たちは常識的に、姿を消したジョゼットをオデット殺しの犯人とみて大捜査線を敷いたが、警視庁の総力を挙げた執拗な探索にもかかわらず、容疑者ジョゼット・ラルースの行方は杳として知れなかった。

続いて、オデットの愛人だったアンドレ・デュ・ラブナシがオベラ広場の高級ホテルの一室で爆殺され、さらにジョゼットの撲殺屍体がブローニユの森で発見された。捜査当局は、ラルース家連続殺人事件の真犯人を、ジョゼットの愛人で資金繰りに苦しんでいた事業家のデュロワと断定したが、この断定を覆し、誰も予想さえしなかった真犯人の名を克明な推理によつて指摘したのが、謎の日本青年ヤブキ・カケルだったのである。カケルをこの事件に引き入れたのは、素人探偵に子供じみた憧れを抱いていた私自身だった。そして、カケルの告げた事件の真相は、そんな私を驚愕で打ちのめすに充分なものだった。

真犯人は、私の友人たち、アントワヌやジルベールやマチルドだった。彼らは「赤い死」と呼ばれるテロリスト秘密結社のメンバーだったのだ。カケルは、ほとんど冷酷といつていい突き放した態度で、主犯のマチルドを不可解な自殺に追い込んでいった。アントワヌとジルベールを、死の危険が待ち構えているマドリッドに追放したのも、結局、この日本人の仕業だった。そして、カケルの計算通り、

私の恋人になったかもしれないアントワーヌは、親友のジルベールとともに、バスク解放運動の仲間たちを逃がそうとしてマドリッド市内で警官隊に射殺された。この小さな事件が新聞で報道されたのは、ちょうど一週間前のことだった。私が激しい口調でカケルを批難したのは、そのためだったのだ。

私には判らなかつた。どうしてこの青年が、たとえ犯罪者だとはいえ、マチルドやアントワーヌにあんなにも冷酷な態度をとりえたのか。

「この一週間、あなたのこと、アントワーヌたちのことを考えて過ごしたわ。そして、あなたともう一度話し合いたいと思ったの。あの時の私のいい方は確かに感情的で、一面的なものだった。それは反省してるの。でも、その上で、もう一度きちんと話し合いたい。私のしたことの意味、あなたがしたことの意味、これをはっきりさせたいの。私たち、友達でしょう。私たちの友人関係を続けていくためには、それが避けて通れないの」

サン・ミッシェル通りに開いた入口から、私たちはリュクサンブール公園に入った。鉄門の脇には、もうアイスクリームを売る屋台が出ていて、学校帰りの子供たちが群がっていた。汗はとめどなく流れ落ちていたけれど、緊張のためか、私には苦にもならなかつた。

「それで、君はどう考えた」ぼそりと、呟くようにカケル

がいった。

「アントワーヌたちの死に対して、もしもあなたが有罪だとしたら私も同じように有罪だって思ったわ。作為の罪と無知の罪……。どちらも同じだわ。面白半分であなたを事件に巻き込んだのは私だった。もしも犯人がアントワーヌたちじゃなかったら、私も、犯人が生きようと死のうとまるで他人事だったでしょう。そんな自覚のない無責任で傲慢な態度が罰せられたのだわ。他人という存在への思いやりの、いえ、想像力のあまりの少なさ。これが私の無知の罪よ。あなたがね、例えばアントワーヌたちが憎くてあんな風にしたのだったら、私はそれで納得できるの。自分は責めても、あなたまで責めようとは思わない。でも私が許せない、いえ判らないのは、あなたがまるで運命みたいにアントワーヌたちに対したってことなの。この時、作為の罪、人間の罪さえ消え去る。あなたは、そう、神が裁くように他人を裁いたのだから」

「僕が裁いたのではない。そこに裁きがあったとしたら、アントワーヌが自分で裁いたんだ」

「いいえ、違うわ。自分の考えをうまく説明できるとは思わないけれど、あなたは判ってるはずよ。あなたは、交通信号の機械が動くようにアントワーヌたちに道を示しただけっていうのでしょう。そこには個人の意志はないっていうのでしょう。だけど機械（マシナ）の神だつてやっぱり神だ